

ロゲイニング世界選手権

2010年11月20日-21日 ニュージーランド チェビオット

村越真

2年に一回のロゲイニング世界選手権、今年はニュージーランドで開催された。日本からの参加は15名。トップアスリートから、自然の中を歩くのが好きな女性グループまで、多様なチームが参加した。

■世界選手権への道

11月19-20日の週末、ニュージーランド南島最大の都市、クライストチャーチの北方約80kmのチェビオットという街で、ロゲイニングの世界選手権が開催された。世界選手権とは言っても、エントリーは自由。優先枠や国ごとの枠はあるものの、基本的には誰でも出られる。

競技をやっているものなら、世界選手権と名のつくものなら、出られるものなら一度は出てみたい。夜のナビゲーションも久しぶりに味わってみたい。たっぷり24時間行動すると自分はどうなるのか。そんな興味もあって、田島利佳のパートナーとなり、混合の部に参加することになった。

定員は先着500人。オーストラリアやニュージーランドには遠く及ばないが、出場数だけみれば、日本は世界4位なのだそう。日本の帝王柳下はパートナーを探し求めた結果、ハセツネでも20位になった山田高志との出場。高得点が期待できる。アウトドアやランニングから入ってきた岡部淳・田中悦子のペアは、もともとエントリーしてたけど、ついだから結婚式もあげちゃうか、ということになったらしい。アドベンチャーレースやトレランで活躍している伊藤奈緒・マウンテンバイクオリエンテーリングの日本代表である芝田敏仁のペアも期待が持てる。「ロゲイニングにはまる」というコミュニティを主催している藤原さんたちのパーミーも、彼らの出会いの原点ニュージーランドということで、参加した。そんなこんなで、日本からの参加は、7チーム15人。多様な参加者層も、このスポーツの世界選手権らしい。

とは言え、24時間の制限時間、競技エリアも200km²を優に越え、夜間も含めて24時間、大自然の中をチェックポイント目指して動き回るのだ。一般



どこまでも続く牧草地を走るのがニュージーランドのロゲイニングの魅力だ。

の人が参加可能なアドベンチャーの最高峰という見方もできる。

場でもあり、トレーニングの場でもあるはずだ。



日本からの参加者。かがんでいるのがパートナーの田島。その向こう、右左の男性が柳下大・山田高志ペア。その中央奥が伊藤奈緒。

参加者層の詳細はわからないが、オリエンテーリングで見知った顔や名前もあった。アメリカの往年の名選手シャロン・クロフォードやイギリスのイバット・ペーカー（1999年のワールドチャンピオンだ！）など往年のエリートオリエンティアがいる。どんなトップ選手でも歳をとれば、若い時のようなスピードでは走れない。彼らにとって速く走れなければ、どんなコースでもナビゲーションは簡単になってしまう。トレーニングを重ねることで充実感や達成感を得てきた彼らにとって、ロゲイニングは現役を退いても充実感を感じられる活動なのだ。

その一方で、現役ばりばりのアドベンチャーレースチームもいる。ナビゲーションしながらの24時間は、彼らにとっては格好のパフォーマンス発揮の

■あつという間の3時間

スタートは12時だが、9時には地図が配布される。93個以上のコントロールが200km²を越えるエリアに散在している。アップダウンのあるオフロードの牧場とロードでどの程度移動スピードが違うのか。24時間経つとどのくらいスピードが落ちるのか、見当もつかない。不確定要素が多いなかで移動プランを考えなければならない。

いつものようにいくつかのブロックに分割して点数を出してみるが、極端に点が高かったり低かったりするブロックはなく、決め手にならない。トレインは縦横無尽に移動できるので、制約条件が少なく、考えがまとまらない。

オーストラリアに長く住んでいる岡部さんと小泉成行チームの作戦を探ると、「夜は平地を避けることにしました。地形がつかみづらく、難しいと思うので」。これを制約の一つとした。次に、ゴールに向かうラインを設定し、最後にオプションの多い帰還ルートになるように設定した。概ね12時間後にハッシュハウスに一度戻り補給。必要に応じて仮眠し、時間に応じてその後北東を中心に回るという大まかな計画とした。このプランに応じて、着る服と持つ服を決め、携帯する行動食とデポする行動食に分けた。

あれやこれやで3時間はあつという間だ。フライトプラン（白黒にコピーした地図に、予定行動を書いて出すことが義務づけられている）を提出して、

スタート枠に入る。独自のパンチングシステムを使っているが、チップは腕にプラスチックのテープでとめる。このテープ一度外すと、元に戻すことができない。確実にチーム全員でフラッグにいき、パンチしなければならぬ。ここらあたりはさすがに世界選手権というべきだろう。



どでかい地図で事前の作戦を練る。時間は3時間だが、装備まで考えると、それでも足りない。

■スムーズなスタート

スタート後、最初のコントロールは混雑が予想されたので、速いペースで動き始めた。周りには屈強の男子チームが数チーム。これなら混雑もないとみてペースをやや落とす。まずまずの出だしである。一時雨も降り出したが、それも上がって、上々のコンディションである。最初の3時間くらいで、山も含めだいたいペースがつかめた。このペースだと、元々のプランよりもさらにループを広げられそうである。時間とポイントを勘案して、南東に展開することにした。

楽しいナイトナビゲーション

最南端の給水1を通過したのが約7時間の時点だった。ほぼ予想したペースで回れている。この頃から、右膝に違和感を感じ始めたが、陽が暮れて暗くなると、ナビゲーションが楽しくなってきた。視覚情報が格段に限られる夜のナビゲーションだが、今回のようなオープンテレーンだと、完全に暮れてからでも（ほぼ満月の夜だったが、曇天と雨で月明かりはほとんどない）、空は若干白っぽく見えるので、地形の概要はわかる。尾根や谷線では自分の進行方向の変化がよい情報になる。おまけに牧場の中では、遠くの尾根線を移動する他のチームの明かりが見える。彼らは地形に沿って動いていることが多いので、光の軌跡から、地形（特に尾根）が推測できる。暗闇の中で切れ味のいいナビゲーションを遂行するのは快感でもある。北欧でナイトオリエンテーリングの人気があるのも肯ける。

夜ならではの難しさもある。リロケー

トは昼間に比べて大きな困難を伴うので、サムリーディングは必須だ。ロストの代償は大きい。夜も更けてハッシュハウスに近づく時間帯は、10分程度のミスで2回もしてしまい、心身を消耗させた。ハッシュハウスに戻ってきたのは、午前3時を回っていた。雨もひどく、最後のミスで藪こぎをして、ずぶ濡れだった。車のヒーターを全開にして着替えて暖まり、やっと人気がつく。その後後半に備えてハッシュハウスでたっぷりパスタとスープを平らげた。利佳ちゃんが少し眠そうなので、ストレッチをしながら10分ほど休憩し、トータルで約1時間の休憩をとった。

この後夜明けまでの約2時間が、もっともつらい時間帯だった。利佳ちゃんは眠くてペースが上がらない。それを待っていると、寒さが堪える。夜には一時治まっていた右膝の腸頸靭帯の痛みも回復の兆しはなく、走るとさらに悪化しそうだった。最後はだいぶコントロールを切り捨てた。

結果は2400点。混合では13位で、トップとは600点の差があった。その得点は日本人最高得点の柳下よりもさらに200点も上なのだ。40歳以上のベテランに入ったとしても、その結果はほとんど変わらない。トップは降水の激しかった夜間に一度もハッシュハウスに戻らず行動を続け4000点以上の得点を挙げている。トップアスリートからファンランのグループまで、すべてが同じ舞台で競える、その意味でも究極のアドベンチャーゲームである。

■ロゲイニングの行方

レースの前日には国際ロゲイニング連盟の会議があった。会議といっても、会場である学校の教室を借りて車座になって行うというインフォーマルなものだが、ロゲイニング界の現状を知ることができた。今後も現在のような参加選手エントリーの方法を変える気はないらしい。その反面、最近選手が増えているヨーロッパ外のレースが増えたことから、トップ選手が来ていないことも話題となる。参加者層が複雑なだけに、連盟が考えるべき問題も多岐にわたる。

オリエンテーリング愛好者として残念なのは、これが「ロゲイニング」という名前前で別の国際連盟まであるスポーツとして発展したことだ。運営側にとっても参加者側にとっても、要求される精度は違いこそあれ、自然の中でポイントを求めてナビゲーションするのは、オリエンテーリングそのものだ。このスポーツがたとえば「アドベンチャー・O」といった名前であったと

したら、どのように受け止められたかと、ふと想像してみる。

ロゲイニングにおいて現在のような運営形態がとれ、トップ選手をひきつける魅力もあるのは、オリエンテーリング競技の長い蓄積があればこそだろう。アメリカなどのオリエンテーリング発展途上国では、オリエンテーリング連盟の中にロゲイニング部がある国も珍しくない。歳を重ねてもチャレンジを求めるアスリートにとって、ロゲイニングは格好の舞台でもある。両者が互いに情報と場を共有しあえば最強のタッグになるだろう。



かつてはオリエンテーリングの世界選手権をともに走った旧友との出会いも、ロゲイニングの楽しみの一つなのかも。

■テクニカルノート

これから長時間のロゲイニングに参加を希望するために、技術的な情報を書いておこう。今回背負ったのは、約10Lのザック。これに2Lのハイドロと補給食、オーパーウェア、夜間行動用のライトなどを入れた。

ウェアは長袖のウールシャツに軽い防水性のあるベストを着て、下は長いタイツをはいた。ザックの中には、ゴアのキャップ(上だけ)とソフトシェル(中間着)。

夜間行動用のライトは、プリンスの5WのLEDと強力ハンドライト。チェックポイント周りではハンドライトのビームが有効だ。

補給食としてゼリー1本、ジェル1個(ワイルドビーンズ)、小マフィン4個程度、柿ピー小二袋、ドライフルーツ+ナッツミックス 100g程度。コンデンスミルク1本。阿蘭梨餅2個、ショートブレッド4本程度。

補給後の後半は、ジェル1本(レモンライム)、ショートブレッド2本程度、マフィン2個程度、阿蘭梨餅半分、ハッシュハウスでたっぷりパスタを食べたので、あまり空腹を感じなかった。特にしょっぱいものに対する欲求は一切でなかった。

ビニール袋はくれるが、雨の中で出し入れする可能性を考えると、幅広の粘着テープで保護したのは正解だった。本当はブッカー(本のほごシート)がもっとよいのだろう。

(村越 真)